

史実と伝奇

—清末民国初期における小説内外の女学生—

呉 桐

黄 湘金

史事与传奇：清末民初小说内外的女学生

(北京：北京大学出版社, 2016)

Tong Wu

1. はじめに

本書が研究対象として取り上げられている「女学生」は、近代の女性史研究や教育史研究において、熟知されているテーマである。それは、女性の存在感は近代の女子教育とともに増したと言われているように、女子教育によって生み出された女学生は、旧来の父権・男権社会がいかに揺るがされ、それに伴う社会の激変がいかなるものだったかを考察するにあたり、非常に価値のある課題だからである。

中国において、1898年に中国人が経営する初めての女学校「中国女学堂」の創立を皮切りに、全国各地で女学校が続々と開かれていった。1907年となって、『奏定女子師範学堂章程』と『女子小学堂章程』の公布により、「女子教育が正式的に学校システムに組み込まれる」(程 1936)こととなった。こうした女子教育の拡大・制度化を背景に、女学生の姿が新聞をはじめ、画報、文学作品など、多様なメディアに現れてきた。とりわけ小説は1902年に起きた「小説界革命」^①以降、創作出版の隆盛期を迎え、豊富な女学生像を提示した。小説を用いて女学生を考察することの必要性・有用性は自明のことであろう。本書は、そうした清末民国初期の小説に描かれていた女学生に焦点を当てたものである。

北京大学出版社の「文学史研究」シリーズに属する一書とはいえ、本書の持つ特色の一つは、中心的資料である小説以外にも、広く文献を渉猟し、小説が出された時代の歴史的コンテクスト、社会意識の考察に重点を置く点にある。新聞雑誌はもちろん、機関誌、地方誌、さらに時調、竹枝詞^②といった民俗的な文芸作品も取り上げられ、女学生をめぐる社会全体の言説空間に迫っている。また、史実の掘り起こし作業を通じて、小説テキストと現実世界との関係が明らかにされている。

著者が目指すのは、小説を史料として用い、そこから「女子教育の歴史及び女学生の足跡」(p.15)を発見し、同時に、小説テキストを他媒体の記述と照らし合わせることで、「作者の意

図、読者の好み、小説のメカニズム」(p.15)を明らかにすることである。テキストの文学的価値に注目するのが多かった従来の文学研究においては、あまりなされてこなかった点で価値のある試みである。また、女学生像の社会的意味を追求するところでは、社会学的にアプローチしようとする研究にも大きな示唆をあたえるものであると考えられる。

2. 著者の紹介

黄湘金(1981～)は2010年、北京大学で文学の博士号を取得し、現在中国・西南大学・文学大学院の准教授を勤めている。主な研究領域は中国の明清文学、近代文学、近代女子教育である。

黄の近年に発表された論文を概観すると、近代中国における女学生・女子教育への関心が一貫していることが分かる。「貴胄女学堂考論」や「“癸卯学制”与晚清女子教育」など^③、清朝政府が主導の女子教育を考察した研究が挙げられるほか、人物研究に、近代の女子教育を真っ先に受けた沈佩貞、呉淑卿、陳衡哲ら^④に注目するものもある。とくに沈と呉の事例は本書の第2章で女英雄型女学生の典型としても取り上げられており、論拠となるものが豊富に引用されていることから、著者の長い研究の蓄積が見られる。

著者は、北京大時代に夏曉虹に師事し、こういった関心を深められたという。本書においても、夏の論から受け継がれているところが多く見られた。著者が北京大で博士号を取得した際の論文の題目は本書の副題でもあり、「清末民国初期における小説内外の女学生」である。本書はそれを元にまとめ出版したものである。

3. 本書の概要

本書の構成は以下の7章からなっている。

導言

序章

第1章 “女学小説”的生成与全景

“女学小説”の誕生と全貌

第2章 “英雄”的起落

“英雄”の起伏

第3章 爱情的神圣、罪恶与难局—清末民初女学生的“自由結婚”叙事—

愛の神聖、罪悪とジレンマ—清末民国初期における女学生の“自由結婚”をめぐる
叙述—

第4章 曖昧的夜花园—黒幕、小报与女学—

妖しい夜の遊び場―黒幕、小新聞と女学―

第5章 圧抑と救贖―清末民初小説内外の妓女和女学―

抑圧と救い―清末民国初期における小説内外の女学と妓女―

余論： 小説文類と女学生形象

終章 小説ジャンルと女学生表象

まず、序章では、本書で用いられる「清末民初期」、「小説内外」、「女学生」といった重要概念についての説明がなされている。本書では、「清末民初期」とは、1898年から1919年までの時期を指す。始まりだとされている1898年は、前述のように、中国人が経営する初の女学校が創立された年であり、下限の1919年は五四新文化運動が行われた年である。五四運動以後、女学校や女学生の風景が一変したこともあり、本書では扱わないという。ただし、1920年に出版された幾つかの女学小説はまだそれ以前の作品と断裂しておらず、研究上にも参照する価値があるため、それらも研究対象にしている。「小説内外」に関しては、小説以外に、他の研究資料にも関心を払うと説明されている。主に6種類あり、それぞれ①論調が穏やかな大新聞、②革命的でラジカルな新聞紙、③フェミニズム論に熱心な女性誌、④女学校の校刊を含む教育系新聞雑誌、⑤世俗的な小新聞、⑥竹枝詞、詩、回想録、日記、地方誌など、である。最後に、「女学生」とは著者によれば、女学校に在籍していた女子のみならず、女学校での経験が当事者のその後の人生にも影響を与え続けることを考慮に入れば、女子教育を経験したことのある人であれば皆考察対象でありうるという。

序章の導入に続く本論、つまり第1章から第5章までの内容は、女学小説が誕生した時代背景と当時の女学小説の概観(1章)、女学小説に描かれていた女学生の四つの類型(2章-5章)が紹介されている。女学生の類型として、革命の真中に登場する「英雄」、自由結婚を高唱する「自由女」、「夜花園」に出入りする女学生、そして女子教育を受けようと試みる妓女が抽出される。これらの類型はまた、それぞれ政治小説、言情小説(恋愛小説)、黒幕小説(暴露小説)、狭邪小説(妓女を扱う小説)といった中国近代小説のジャンルと対応していると、著者は指摘している。作品のジャンルによって、起用される女学生のイメージも異なってくるという文学の内部規制については、終章で多くの紙幅を割いて論じられている。

第1章「“女学小説”の誕生と全貌」では、女学小説が確立していった過程と本書の執筆にあたり著者が収集した女学小説の概観が紹介されている。中国近代小説における旧来の分類であった「女界小説」、「女子教育小説」⁶⁾などと異なり、著者は自ら「女学小説」の概念を打ち出し、「女子教育と関わる思潮及び活動に言及し、或いは女学生が登場人物である小説」(p.12)と定義した。かなり広い定義である。必ずしも女学生がヒロインであるとは限らず、また特定の読者を想定せず、必ずしも女学生を教諭するようなものばかりではない。たとえ「断片的な印象」(p.13)であっても、小説に映される女学生に対しての当時の社会意識を見逃したくないという。こうした女学小説が誕生したときの時代背景と女学小説の特徴もこの章で紹介されている。

女子を教育することは中国古代にはすでにあつた実践だが、三従四徳の道德規範を女性の中

に植えつけるためのものに過ぎなかった。受講の場所も家族内に限定され、「家塾」と呼ばれる所で行われていた。近代中国の女子教育はそれらに取って代わり、西洋的教養が重視され、また女学校という公共の場で授業が行われる点で、数多くの女子を魅了した一方、議論され、多くは批判されることも免れなかった。1900年代からの、女学生の生活、女学校の様子に対する関心の高まりは当時の新聞における報道の豊かさから見られる。

新聞記事に次ぎ、女学生は文学創作の素材としても用いられるようになる。それまでの女性と教育を扱った小説では、女性が科挙と関連付けられて語られることが多かった。明朝の『女開科伝』のように、男性世界の科挙制度に倣ってストーリーが構成されている。しかし、現実基盤が欠けるが故に、作品は数が少ないほか、内容も稚拙である。近代となって、1903年に出版された『女拳人』を皮切りに、留学経験を持つ女学生が各地で政治演説を行うような、当時の事情と近い物語が描かれてきた。このように、現実世界での女子教育の進展と結びつけられることがあったため、小説の史料としての価値も高まったという。

近代中国における女学小説の主題には時代の刻印が顕著に見られたのは確かである。「小説界革命」以降、小説の教化的機能が強調され、1911年の辛亥革命までは国家や民族のために献身するような女学生が多く描かれていた。民国成立後、都市文化の浸透で小説に娯楽的な要素が求められたため、恋愛小説や女学校の裏事情を暴露するような悪趣味な「黒幕小説」の創作が盛んになる。

当時の女学小説の作家は、女学校で勤めた経験を持つ人が多かった。近いところで女学生や女学校生活を観察することが可能だったのである。一方、小説を愛読する女学生や、小説家のことを慕う女学生がしばしば小説に現れていたことは、小説が教育課程に使われた当時の事情と関連しており、さらに女学生読者の成立を裏付けていると分析されている。このように、女学小説をめぐって、作家-テキスト-読者のリンクが形成され、三者の間はそれまでになかった親密な関係が結ばれたという。

本書の考察に取り扱われている女学小説は、単行本175冊のほか、雑誌に掲載されるものが197作ある。膨大な資料を通じての、清末民初期における女学小説、女学生像に関する網羅的な分析が後述の章でなされている。

第2章「“英雌”の起伏」では、辛亥革命前後に一時的ではあるが広く流行した「英雌」型の女学生像を秋瑾、吳淑卿、沈佩貞らの事例を通じて考察されている。「英雌」はその名が表すように、才知や武勇などがすぐれる「英雄」と性別上で対置される、女英雄の意味である。「英雌」が現れた背景には、清朝政府の腐敗と西欧列強の侵略に憤慨し、革命を起こそうとした中国男性知識人の女性に対する期待があった。彼らは女性にも尚武精神が必要だと考えたのである。それに応じて、尚武精神を学校の理念として掲げる女学校が次々と出現し、女学生自身も、新聞雑誌に寄稿することで女英雄として活躍したいと決意を表した人が多い。実際に、革命で人を動かすような演説力や行動力は当時では女学生しか持っておらず、「英雌」は必然的に女学生のイメージと結びつけられたのである。

秋瑾の例では、ロラン夫人などの西洋の女英雄をモデルとした翻訳小説に影響され、彼女たちに倣って命を捨ててまで革命を守ろうとした女学生が紹介されている。秋氏は反対派に殺害

された以前に自伝的小説『精衛石』を著し、「英雌」であるヒロインを描き出している。一方、秋氏死後、彼女の生涯物語はまた小説の素材に多用され、「英雌」の創出に関わった。女学生が如何に小説内外に出入りし、作者-テキスト-読者の連動に関与するかを示す貴重な一例である。

続いて挙げられている呉淑卿と沈佩貞は、共に辛亥革命期で女性軍を組織した人物である。女性の従軍は従来の規範から逸脱したものの、革命期では愛国主義と民族主義によって正当化され、推奨までされた。呉と沈は2人とも女性従軍の典型として神話化して政治小説や歴史小説に描かれていた。しかし、興味深いのは彼女たちの革命以後の運命である。辛亥革命後、女性軍は実績がなかったなどで、政府によって解散を命じられた。元兵士たちは参政権運動や女子教育に転じる人が多かった。呉淑卿もその中の1人である。しかし、湖北省で第二女子師範学校の校長を務め、教育界で活躍していたとはいえ、新聞にしても小説にしても、その晴れ姿を取材するものはほとんど見られない。一方、沈は政治団体である同盟会に参加した。やがて政党の綱領に男女平等に関する条例が削られたことで指導者の宋教仁に平手打ちをしたことが話題となり、彼女の英雌としてのがむしゃらさは依然としているが、輿論から批判を受けるようになった。1917年に出版された『饒吹』や1928年の『民国艶史』などの小説では、擲楡のまなざしで沈の平手打ち事件が語られている。

この章で紹介されている「英雌」の浮き沈みは、ナショナリズムとジェンダーの緊張関係を反映するものであるという。革命期では、民族存亡の問題が優先され、剛強な気質を持つ「英雌」型女学生像の創出をもたらしたが、それは一時的なものにすぎず、闘争が鎮まった後、期待のまなざしが無視か擲楡へと変わっていった。結局良妻賢母のジェンダー規範に抗しえなかった女学生の苦境が照らし出されるのである。

第3章「愛の神聖、罪悪とジレンマ—清末民国初期における女学生の“自由結婚”をめぐる叙述—」では、女学生の自由結婚を題材に扱った作品の分析を通じて、清末期、民国期の小説テキストにおいて、それぞれは国家的ディスコース、道徳的ディスコースが優位性を持っていたことが検証されている。1900年代から新聞や雑誌に数多く掲載された結婚相手募集広告は、女学生と関連するものがほとんどであった。自由結婚の実践は、女学生のイメージと結びつけられて旧来の価値観にぶつかっていったのである。

清末期では、前述のように、亡国の危機感のもとで、個人より国家のことが第一とされていた。自由結婚も、提唱された初めての頃では、男女の自由な結合によりもたらされる円満な家庭生活は国のためになる、という理屈で合理化される。小説においては、「国妻」、「国女」といったような極端な女性像まで登場した。これらは、「夫に嫁がばイギリス国」⁶⁾というエリザベス女王を謳った詩文に由来した、当時はやりの言葉であった⁷⁾。私情を捨て、国に献身することが求められたため、清末期の作品における恋愛は国家主義的な描写に止まった。例えば『女子権』や『道徳愛情』などの作品では、ヒロインである女学生は自分に心惹かれてやってきた男子に対し、往々にして「国のため」云云との恋愛観を説教する。

民国期に入り、「自由女」という新たな女学生像が小説に浮かび上がった。民国成立後、革命風潮が収まってきたに伴い、清末期で強力に働いていた国家ディスコースに取って代わり、道徳的ディスコースが蘇ったという。自由結婚は風紀の乱れだと批判の矢面に立たされた。小説

においても、自由結婚を追求する「自由女」については、否定的な眼差しが向けられ、悲劇的な結末が多かった。ストーリーの流れは大きく2つに分かれる。1つは、現在の言葉で言うと、結婚詐欺師にあたる相手に騙され、貞操も財産もなくしてしまうパターンと、もう1つは、自由恋愛を口実に、実は金と体だけ欲しがって男性を弄んだあげく、墮落してしまうパターンが挙げられている。いずれも自由女の行動（たとえ女学生が被害者であっても）が批判されていることから、作者の保守的な立場が窺えるという。

一方、同時期の読者は、このような女性に偏見を持つ作品は実に女学生に不公平であり、「女学生を以って世相を描くにしても、これほど荒唐無稽な話は分に過ぎる」(p.222)と不満を言う人もいた。作者の意図的な筆遣いに懐疑的態度を抱き、抗しがたい旧来の規範が小説テキストに影響を与えていることを看破した意見であると、著者は見ている。また、民国期において「情之正」（礼節を守る自由恋愛）という叙述形式もあったが、それらもほとんど悲恋に終わっている。これは、ストーリー性を必要とするという小説の特性に左右されることは否めないが、民国期における自由結婚観念の受容の限界を示しているとも考えられるという。

第4章「妖しい夜の遊び場―黒幕、小新聞と女学―」では、民国初期における女学生をめぐるスキャンダルが考察されている。舞台は消費文化が発達していた上海である。上海では、「黒幕」と呼ばれる独特な文学ジャンルが形成されていった。「黒幕」とは、裏事情の暴露を主題とする叙述形式のことであるが、内容的には信憑性が低く、読者の目を引くために捏造されたスキャンダルがほとんどであったという。

女学生を扱った黒幕記事や黒幕小説には、「夜花園」という空間がしばしば言及された。「夜花園」は、19世紀後半から商業都市として発達していた上海に出現した夜の遊び場であり、公園に電気を引き、マジック、ダンス、ゲームなどが行われたりした。夜花園は大抵女学校の近くに設け、女学生を無料入園させることで招客した。こうした卑俗な営業戦略が施されていたがゆえに、夜花園にますますいかかわしいイメージを増幅させた。やがて夜花園は男女の密会を想起させる場所となり、小説に書き込まれる場合は、男性の欲望が託されるメタファーとなったのである。作中で夜花園に出入りする女学生は娼婦扱いさえされ、それが作者からの一種の警告であると同時に、公共空間に現れ始めた女学生に対する困惑の反映としても捉えられるという。さらに、当時の女学生の視点に立ってみると、消費文化が爛熟していた上海が夜花園であるかのように、女学生を囲む環境は実に陰悪だったものである。

当時の黒幕物の多くは世俗的な小新聞に載せられた。小新聞の経営陣は大衆の趣味に迎合し、スキャンダルを作り出すことを得意にした。例えば、男性教員と女学生の不潔な関係を暴露するなど、悪趣味的なものばかり載せられたのである。清末期においては高嶺の花だった女学生も、この時から小新聞に満ち溢れるスキャンダルによって脱神話化してきたという。

黒幕小説について、1915年に政府から禁止令が出されたが、その蔓延を止めることができなかった。黒幕物の流行りを支えたのは、他人の私生活を覗き見したいという読む側の欲望であるという。当時では、男子が女学生に扮装し女学校に入るというプロットがよく作中に見られたゆえにも、ここにあるものである。女学生は現実世界で凝視されるだけでなく、黒幕小説ではさらなる凝視にさらされていた。そうしたまなざしは創作側の欲望、出版側の戦略、そして

読む側の期待(p.256)を映し出している」と著者は見ている。作者が残した批評（作者が第三者として作中に現れ、批評するという中国小説の伝統的な手法）には、女学生を尾行、凝視する登場人物に対する批判が多く盛り込まれているが、作者自身が創作意図の不当性を隠蔽しようとする戦略と見て良いという。また、読者にしては、出版側の意図を見抜かず、自分の覗きたい心理を反省しないことも黒幕小説の蔓延を助長したという。この中、女学生が欲望の符号と化し消費されていってしまった。ここからも、女学生は厳しい視線にさらされていたことが窺えるのである。

第5章「抑圧と救い—清末民国初期における小説内外の女学と妓女—」では、女学生になろうとした妓女たちについての分析が行なわれている。妓女とは日本の遊女にあたる存在であり、古代中国において、彼女たちは同時代の女性に比べ、社交の面ではるかに自由であった。それが近代となり、女子教育の隆盛で女学生も公場に現れるようになってから、妓女と女学生は非常に大きな関わりを持つようになった。女学生のファッションを模倣し、招客する妓女もいれば、妓館に入り、酒宴を開く女学生もいた。小説の中においても、墮落女学生が結局妓女に身を落とすしかないプロットや、風紀の乱れる女学校を「淫窟」と描写するものが常套となっており、両者の関わりが語られている。

とはいえ、墮落する女学生はいるものの、女学生になれた妓女はいなかった。中国では早くも1900年代前半から妓女向けの女学校を立てようとの報道があった。このような発想は妓女たち自身の願望によるものであり、彼女たちは、年季が明けた後に備えるため、また技芸の面で新たな教養を収めるために女学校が必要だと認識していた。しかし、女子教育の名誉を汚すと散々批判されたほか、実際に「兼業」としての学業を怠る妓女が多く、また資金面でも困難であったため、妓女学校は当時ではほとんど失敗した。小説における妓女学校もユートピア的にしか描かれておらず、妓女が教育を受けることの非現実性を反映しているという。

また、この章では、当時世間における批判の声は、女学生としての特権的地位を維持する戦略に基づくものであったと指摘されている。1907年に公布された『女学堂章程』は、「清白なる出身」を女学校の入学資格とした。これによって、妓女は最初から女子教育から排除されたのである。妓女と女学生の間には横たわる身分の差は確固なものであり、妓女を入学させれば固有の秩序が崩壊すると考えられていた。ここで挙げられている『鞠有黄花』と『碧海珠』の2作において、妓女であった2人のヒロインはいずれも身請けされた後に女学校に入り、ついに輝かしい活躍を果たしたのである。この2作から、女学生は明るい未来を保証する象徴として妓女から憧れられたことと、妓女という身分のままでは女子教育に接近することの不可能が見て取れるという。

一方、国の角度から妓女の入学を正当化させようとする動きもあった。当時中国の妓女は災害の救済や革命の応援などで積極的に国事に関わろうとした。しかし、これらの行動は表面上の賞賛にとどまり、実際に彼女たちの地位向上につながらなかったという。小説において、妓女勇ましい行動がポジティブに捉えられる一方、差別用語で描写されているのが、その表れの一つである。これに関して著者は、国家ディスコースに支配され、利用されている点では、前述の章と合わせて見れば、女学生も同様であるという論を展開した。すなわち、妓女と女学生、

一見して雲泥の差があるようであるが、「国家権力、道徳規範、消費文化、男権社会に侵されている」(p.347)点では同じく軟弱な立場にあった。妓女に対しての女学生側の排除は、自身の立場への認識不足を示しているという。

最後に終章の「余論」では、著者は1章～5章で扱った女学生像から見てきた当時の歴史的コンテクストについて、ジャンルという観点から説明を加えた。R・ウエレツクの『文学の理論』を引用し、ジャンルは「秩序に関する理論」であり、「文学上の特殊な組織と構造の形式を基準」であると強調する。つまり、文化のコンテクストといった外部の要素によってではなく、ジャンルはテキスト自身の文体や主題によって規定されている。清末民国初期における小説のジャンルは、大まかに言うと政治小説-社会小説-恋愛小説-暴露小説という流れをたどっていた。それぞれは1章で紹介されているように、盛んだった時期や愛用している題材などが異なっている。ジャンルによっては、作者の立場が微妙にずれることもあれば、文章に没頭する前に読者のある種の期待が先行することもあった。故に、女学生像の変遷は現実世界における女子教育の進展や大衆意識の変化に影響されるのは無論であるが、取り上げられている作品のジャンルの特性にも関心を払うべきだというのである。

全体的にみると、清末民国初期における小説の中の女学生像は、「溢美」(美を掲げる)から「溢悪」(悪を掲げる)へと変化したと、著者はまとめている。本書で分析されている四つの女学生像の類型は鮮明である一方、作中で形式化しているきらいもある。生き活きであったはずの実際の女学校生活が小説にはあまり見られなかったという。

また、終章では、これらの女性像を描き出した作家の立場についても分析されている。清末期的小説作家は小説の教化的機能を重視し、「綱紀」と「道徳」にとらわれていた。新しい思想に直ちに適応できず、女学生を扱うときに、混乱も生じたという。これにより、作中の女学生にはしばしば新旧の価値観の混在が見られ、不自然な描写がなされているところもあった。民国期では、消費社会化で読者の趣味に迎合することが求められるようになったため、この時の小説作家は、本来の創作意欲を抑圧せねばならぬことも少なくなかったことと推測できる。このように、女学小説において、「綱紀」、「道徳」、そして「消費文化」は、作家を常に束縛することで、小説テキストに多大な影響を与えていた。なお、多くは小説作品の文学的価値を損なったのである。

4. 考察

本書の中核をなす2-5章の分析は、いずれもまずは、小説テキストから少し距離を置くところで、女学生をめぐる諸問題と当時の言説空間を描き出し、それからテキストに入り込み、多様な資料を綴り合わせながら筆を進めたものである。タイトルの「史実と伝奇」^⑧が意図するように、虚構的な文学作品を以ってどれだけ歴史的事実たるものが解明しうるかという問いは本書全体に通底する。その問いに対し、本書は作品のジャンルが持つ本来の規制力、いわゆるテキスト解釈の限界に留意しつつ、小説に映される社会意識を最大限に解明しようとした。

それを支えたのは著者の綿密な考証作業である。小説のモデルとされている人物は無論のこと、新聞記事などの引用に際しても、執筆者の性別や履歴をほとんど特定している。さらに、作中に言及されている歴史事件についても、何種類かの資料を調べることで、それらと小説テキストとの共謀や背戻が詳しく考察されている。従来の研究で不明だったところや誤ったところを補充・修正したのも原著の価値のひとつであろう。

確かに、資料の巧みな照らし合わせで当時の社会意識を見せてくれたのが魅力的である。しかし、やはり読者側の反応に関しては、やや物足りなさを感じさせられる。全篇を通して読者の投稿意見は、3章での「不平子」の引用しかなかった。しかし、それは日本の翻訳小説に対する批評であり、参照にしにくい。著者はそれを用いて、読者と作者（訳者）の女学生に対するイメージのズレについて説明しているが、前文の分析とのつながりが弱く、その妥当性も検討する余地があるであろう。小説作品がいかにか読まれていたか、作者の意図が伝わっていたかといった問題も、当時の社会意識を考察する上で重要な課題であり、そのために読者側の反応を見ていく必要があるのではないかと思われる。

さらに、様々な女学生イメージが作られていった中で、女学生自身がどのような考えを持っていたかについてさらなる考察が必要であろう。というのも、5章の終わりのところで、「女学生の妓女に対する敵意は、彼女たちが自身の立場への認識不足を示している」（p.347）とあるが、ざっと触れるだけで済ませており、どのような敵意だったのかなど、論の展開や論拠の提示に乏しいからである。ここで示唆的だと思われるのが、2章での秋瑾の例である。秋が小説に影響され、小説を創作し、最後に小説の素材にまでなったように、「小説内外」に深く関わった女学生もいたのである。中国女性文学史研究において、中国の女性文学を「歴史の地表から浮上させた」契機は1919年に行われた五四新文化運動であるとされている（孟、戴 2004）。それによって、中国初の女性作家たちが生まれた。しかし近年では、それ以前に女学生により書かれた小説も掘り出され、女性作家の前段階の作品として注目を浴びている。それらの作品には、「麗質天成、聡敏过人」（天賦の端麗、傑出の聡明）というような女学生像が描かれており、そして作者自身の登場で日常生活での見聞と思われるものも書き込まれている（馬 2014）。「小説内外の女学生」を考察するにあたり、こうした女学生自身による主体性の構築も非常に興味深く、考えるべきであろう。

また本書は、各種女学生像の誕生と変遷について、ナショナリズムの観点に立った解釈が多い。1911年に起きた辛亥革命を分水嶺に、それ以前では国家的ディスコースが圧倒的な力を持ち、小説テキストを統制したとの分析がなされている。例えば、2章で挙げられている「英雄」は、ナショナリズムの力がジェンダーの力を凌駕したがゆえに誕生したと見られる。しかし、ここで指摘すべきは、清末期におけるナショナリズムは少なくとも2種類あったことである。一つは、清朝を打倒して共和国を作るという、「反満州族」を急務としたナショナリズムと、もう一つは、内戦を避けて外国の支配から脱出しようという、「反列強国」を急務としたナショナリズムである（唐 1993）。両者は政治意識が異なり、前者が西洋から新思想を取り入れる革命急進派であるのに対して後者は、「忠君愛国」の儒教的倫理が根強い穏健派である。

著者はこうした差異を考察していないまま、国家的ディスコースと一括して論じているが、

違和感があるところもあった。例えば、3章の「国妻」と「国女」の項で挙げられている『女子権』は、自由結婚を父親に妨げられた女学生がのちに政治活動での活躍で宮中の顧問に雇われ、たまたま結婚のことを皇后から賛成されたのをきっかけに、父親にも許され、ようやく愛し合う人と夫婦になった、というストーリーを描いた。「社会道德、家父長制」が「国家」に席を譲っているような書かれ方であると著者は分析しているが、ここで言う国家は封建的であり、同じ項で挙げているほかの作品と比べては異色だと思われる。『女子権』と違い、『自由結婚』や『女媧石』などに描かれている女学生は、「異族を駆除し」、「民族革命に献身する」(p.192-193)ことを理念に掲げており、本来の「国妻」の意味と合致している。とくに、ここで著者は、『自由結婚』は内容的にあまりにも急進的であったため、清朝政府により禁書とされていたことにも言及している。それに対して『女子権』はどう扱われたのかという疑問が自然に生じたのである。2つの国家的ディスコースが存在したならば、それらを分けて考察することで、当時の状況や作者の意図についてより深い知見が得られるのではないかと思われるのである。

さらに、良妻賢母についても、清朝の主張した旧態依然たるものと、革命派の主張した進歩的なものとに分けられる(夏 1998)ように、「英雄」と良妻賢母の間には差異だけではなく、共通性も存在するはずである。のちの民国期に現れた「自由女」もまた非良妻賢母であると単純に見てはならない。小説における女学生像を考察する場合、時代とともにバリエーションを増やしていった女子教育の旨をより深く分析していく必要があるであろう。

〈注〉

- (1) 清朝末期に維新革命を指導した梁啓超が主宰の月刊誌『新小説』の創刊(1902年)が革命の始まりだとされている。梁は積極的に小説の効用を説き、小説を以って社会・政治を変えようと唱えた。小説界革命により、小説の地位向上が促され、また日本の政治小説を翻訳するなど中国に政治小説というジャンルを確立させたのである。
- (2) 「時調」は流行の曲調という意味であり、文学ジャンルとしては「時調小曲」ともいう。さまざまな曲調や芸能を含みうるジャンルとして、唱本にまとめられ出版されるだけでなく、清末民国期の女芸人らにより上演されたりもした。また、竹枝詞とは七言絶句形式の旧詩の一体であり、その土地の風土・人情を民謡風に詠んだものである。
- (3) 「貴胄女学堂考論」及び「癸卯学制」与晚清女子教育」はそれぞれ、1906年での貴胄女学堂の創立を事例に、西太后が宮内で進めた女子教育の状況について、当時の新聞を取り扱って考察した研究と、1904年、清朝政府に公布された『奏定蒙养院章程及家庭教育法章程』が女子教育に対するポジティブな一面を掘り出した研究である。政府側の動きは見かけ倒しのものであったことを明らかにしながら、当時の女子教育実施の環境を考察している。
- (4) 沈と呉は後述通り、近代中国の女性軍を組織した人物であり、陳は中国初のアメリカへ渡航する女性留学生である。近代白話文体の試みを行った先駆者ともされている。著者である黄は陳衡哲の留学前に上海中西医学院での創作に注目し、彼女が儒教的大家族における複雑な

人間関係を鋭く察知し、女性の抑圧された状況を早くも痛感していたことについて分析している。

- (5)著者によれば、女子教育を扱った小説について、近代中国では「女子教育小説」と「女界小説」との分類はあったが、恣意的なものにすぎなかったという。前者は『女報』により提示された分類であり、同新聞に掲載された『白牡丹』と『儂薄命』の2作が属するが、いずれも未完結の作品で総括的な研究には取り扱いがたいとしている。一方、「女界小説」について、当時の各出版局の基準が統一しておらず、また、小説以外の作品が混在することもあると指摘している。したがって、本書では、著者自ら「女学小説」の定義がなされているのである。
- (6)夏(1998)によれば、「夫に嫁がば」の出所は1902年創刊間もない『新民叢報』に掲載された、愛国をテーマとした雑文「史界兎塵録」であるという。「史界兎塵録」では、生涯未婚のイギリスのエリザベス女王の名句「吾れ已に嫁ぎて一夫を得たり、その名はイギリスなり」が引用されており、女性の救国の熱情を大いに煽いた。やがて「夫に嫁がば」は広く受け止められ、清末期の常套句として詩文に反復されたという。
- (7)齋藤(2000)は、中国の妓女は日本の遊女もしくは芸妓当たる存在であると述べている。なお、中国の妓女の特徴は、話術・詩作・酒令に優れているかという才知による教養的な側面が重視されているという。
- (8)「伝奇」とは、もともと中国の唐代(618-907)に書かれた短編小説のことを指しており、超自然的な怪異譚や逸話を記録した志怪小説より発展し成立したジャンルであるため、濃厚なファンタジー性がある特徴だとされている。ここでは、ファンタジー、虚構的というような、「史実」と対義的な意味で用いられている。

〈文献〉

- 内田道夫編、1970、『中国小説の世界』、評論社。
- 夏曉虹著、清水賢一郎・星野幸代訳、1998、『纏足をほどいた女たち』、朝日新聞社。
- 齋藤茂、2000、『妓女と中国文人』、東方選書。
- 程謫凡編、1936、『中國現代女子教育史』、中華書局。
- 馬勤勤、2014、「“浮出历史地表”之前的女学生小说—以《直隶第一女子师范学校校友会会报》(1916-1918)为中心」、『文学评论』(6):124-133。
- 孟悦、戴锦华、2004、『浮出历史地表—现代妇女文学研究』、中国人民大学出版社。
- 唐文权、1993、『觉醒与迷误：中国近代民族主义思潮研究』、上海人民出版社。